

巻頭言

世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた。

(ヨハネによる福音書 13 章 1 節)  
立教学院チャプレン長 五十嵐 正司

今年 1 月に NHK の ETV 特集で、昨年逝去された緒方貞子さんの追悼番組が放映されました。緒方さんは国連難民高等弁務官として 10 年にわたり難民に寄り添い、働いてこられました。その番組の中で次のように話されました。「私たちはそんなに平和な、良い世界に住んでるんじゃないですよ。20 世紀が終わってもね。」この言葉に驚きました。聞き間違いではないかと思ひ、ビデオでもう一度確かめた程です。力ある者たちによる権力争い、鉱物資源の奪い合いにより、部族間の熾烈な争い、内乱、また隣国との戦争が起き、今も治まらない状況が続いています。当該国の弱い立場にある人々は、身の危険を感じ国の内外に難民となり、さまよっています。緒方さんはその苦悩する人々に寄り添い、命を守ることを第一に考えて働いた、と言われました。長年、その現実を目の当たりにしてきた緒方さんの厳しい言葉を厳粛に聴き、聖書の言葉を思い浮かべました。旧約聖書ヨブ記 5 章 7 節「人間は生まれれば必ず苦しむ。」、創世記 3 章 17 節 d 以降「お前は、生涯食べ物を得ようと苦しむ。お前に対して、土は茨とあざみを生えいでさせる。野の草を食べようとするお前に。お前は顔に汗を流してパンを得る。土に返るときまで。」土に返る時まで、とは死ぬ時までという意味であり、死ぬ時まで苦労して生きる、と記されています。

私たちは、今、新型コロナウイルス感染症の拡がりにより、これまでの社会活動ができず、心身ともに足ぶみ状態にさせられています。顔と顔を合わせての親しい交流を思うようにはできず、多くの人が参加する集いを中止してコロナウイルスを克服しようとしています。

立教大学では卒業式、入学式を中止し、春学期が始まっても学生は大学構内に入ることができず、パソコンを用いての遠隔授業となりました。

新入生はクラスメートの顔を知りません。秋学期も基本的には遠隔授業です。小学校、中学校、高等学校においても児童、生徒のクラス全員が集うことを避けて登校時間を違えての授業が行われてきました。予想外の出来事です。コロナウイルス克服のためと分かってはいても辛く、心がふさがる思いになっています。親しい人と何か月も会う事ができない。教会において共に集って、祈る事ができないことが、とても辛いです、と涙ながらに話された人の姿を思い出します。

しかし上記の聖書の言葉を思い巡らしたときに、これが人生、と覚悟して受け止める力が与えられました。私たちは決して、一人で苦労しているのではない。イエスは「わたしは世の終わりで、いつもあなたがたと共にいる」(マタイ 28 章 20b) と伝えてくださり、また、絶望的な状況に会おうとも、決してあわてることのないようにと、究極的な平安を与える言葉を伝えてくださっています。「天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない。」(マタイ 24 章 35) イエスは私たちが愛して、この上なく愛し抜いてくださり、常に共にいてくださる。このイエスに出会える時、その喜びは例えようのない喜びとなるのではないのでしょうか。

苦しみの中で、喜びを与えられた津田治子(アララギ派歌人)の詩を紹介します。私の心の深くに刻まれている希望の詩です。治子はハンセン病を患い、その苦しみの叫びをあげた時、イエスが「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」(マタイ 27 章 46) と治子と共に叫ばれた声を聞いたのでしょうか。治子はその喜びを詠います。「苦しみのきはまるときに 倅せのきはまるらしも かたじけなけれ」(苦しみの極みにあったときに 幸せの極みを知らされる ありがたいことだ)